

連載コラム



みずき野と  
その周辺の  
植物と昆虫



第 54 回  
くさもみじ  
草紅葉



もとよし ふさお  
本吉 総男

2019 年 12 月

草紅葉は広辞苑には「秋、草の紅葉すること」とあり、また新明解国語辞典には「秋、霜が降りて、野山の草が赤・黄に変色すること」とあります。ここでは、秋の暮から初冬にかけて草が緑から赤や黄色に変色することと考えることにします。また、草紅葉というと、草原全体が赤や黄色に変色するイメージがありますが、個々の植物が変色することを意味する言語でもあります。草紅葉には、樹木の紅葉・黄葉（カエデ、ツタ、イチョウなど）のような派手さはありませんが、草紅葉は色合いが多様で、それらの美しさにしばしば魅了されます。

草も紅葉することは江戸時代には知られていて、当時の俳句にも詠み込まれています。

酒さびて 蝨 <small>いなご</small> やく野の 草紅葉	宝井其角 <small>たからいきかく</small>
魚汁の とばしる草も 紅葉かな	小林一茶

草紅葉を詠んだ俳句は近代にも多くあります。

猫そこに ゐて耳うごく 草紅葉	高浜虚子
帰る家 あるが淋しき 草紅葉	永井龍男
草紅葉 はかなきものに 入日映ゆ	水原秋桜子

今回は、みずき野周辺の散歩の途中で撮った草紅葉の写真を載せて、多少の説明を添えることにします。

## 1 イネ科：メリケンカルカヤ、トダシバ、コブナグサ、ススキ

メリケンカルカヤは北アメリカ原産の帰化植物で、戦後日本に入り、関東地方以西に広く分布している多年草です。みずき野周辺でも日当たりのよい空き地や土手にごく普通に見られます。晩秋には地上部が枯れてしましますが、枯れる寸前に赤褐色に紅葉します。



メリケンカルカヤ 10月中旬 みずき野第2調整池

トダシバは、農道のへりなどにごく普通に見られる多年草で、晩秋に枯死する寸前に黄褐色に色づきます。トダシバについては、[第16回「イネ科の植物いろいろ\(晩夏から秋へ\)」](#)にも載せています。



トダシバ 11月上旬 取手市貝塚地区

コブナグサについても、[第16回](#)に載せていますが、晩秋には水田のへりを赤紫色に彩色するきれいな一年草です。再度、写真を載せました。

ススキの葉は晩秋から初冬に黄色に変色することがあります。しかし、このような変色はススキの生えている場所によるようで、黄色にならずに枯れてしまうものも多いようです。



コブナグサ 10月中旬 取手市市之代地区



ススキ 11月中旬 守谷市本町地区

## 2 ヒユ科：シロザ、コキア

シロザはヒユ科の植物です。シロザの紅葉について触れる前に、シロザとアカザとの関係について述べておきましょう。

シロザとアカザはたいへんよく似た一年草で、外観では上部の若い葉が白い(シロザ)か、赤い(アカザ)かだけが異なっています。実際のところシロザもアカザも同じ種で、アカザはシロザの変種(つまり変り種)ということになっています。ただし、シロザは野原や荒れ地にごく普通に見られますが、アカザはそのような場所には滅多に見られず、畑地のような肥沃な土地にわずかに見かける程度です。形はそっくりでも、生態的には異なっているのでしょう。参考のため、生育中のシロザおよびアカザの写真を載せておきます。



生育中のシロザ 8月中旬 取手市貝塚地区



生育中のアカザ 8月中旬 取手市貝塚地区



シロザ 11月中旬 守谷市本町地区

晩秋から初冬にかけて、シロザもアカザも紅葉し、両者の区別が付かなくなります。下の写真は夏季にアカザが見られなかった場所で撮影したもので、シロザの紅葉に間違いありません。

コキアは園芸上での名称で、学名コキア・スコポリアから名づけられたものです。下の写真のコキアはおそらく美しく色づく園芸品種です。国営ひたち海浜公園の「みはらしの丘」を埋めつくすコキアは有名ですが、これも同様の園芸品種のようです。コキアは植物学ではホウキギが正式の名称です。大きく育てて<sup>ほうき</sup>箒として利用するので、ホウキギというのですが、木ではなくて一年草です。種子は「とんぶり」といい、食用になります。ホウキギという名はあまり知られていないので、ここではコキアという名を使うことにします。



コキア 10月中旬 みずき野第2調整池花壇

なお、シロザやコキアの鮮やかな紅葉はベタレインという色素によるもので、多くの植物でつくられる色素、アントシアニンによるものではありません。

### 3 キク科：アメリカセンダングサ、オオオナモミ、ヨモギ

アメリカセンダングサとオオオナモミについては、[第29回「『ひっつきむし』いろいろ」](#)に述べていますので参照してください。

センダングサの仲間では、アメリカセンダングサの紅葉が最もはっきりとしており、晩秋に赤紫色に変色します。アメリカセンダングサは北米に原産する一年草で、日本には大正年間に渡来し、今は日本全体に広がっています。

オオオナモミは晩秋から初冬にかけて赤紫色に変色します。北アメリカ原産の一年草で、戦前に日本に入ったとされ、それまで普通に見られたオナモミ（古い帰化種）を駆逐して増殖し、今は、オオオナモミばかりで、オナモミは見当たらなくなりました。

ヨモギは在来の多年草で、春にはその若い葉が草餅の材料として目につきますが、秋にはほとんど忘れられた存在です。でも初冬には普通、暗紫色に変色したのち枯れますが、たまに赤紫色に変色して、美しい葉を見せることがあります。



アメリカセンダングサ 10月中旬本町地区



オオオナモミ 11月中旬 守谷市本町地区



ヨモギ 11月中旬 守谷市本町地区

## 4 水田・湿地の植物：チョウジタデ、キクモ、タコノアシ

チョウジタデは第35回「[水田と湿地の植物\(1\)](#)」に載せていますが、美しく紅葉する植物なので、その回と同じ写真ですが再度載せることにしました。

チョウジタデはタデ科の植物ではなく、アカバナ科の植物で、水田のへりや湿地に普通に見られる在来の一年草です。晩秋から初冬に赤く色づきます。

キクモはオオバコ科の植物ですが、オオバコとは異なり、水辺または水中に生える在来の多年草です。水上の葉も水中の葉も裂けていますが、裂け方が異なります。水上の葉はキクの葉に似た裂け方ですが、水中では糸状に裂けます。キクモの名称は、水上の葉の形に基づいています。また、藻のように水中でも育つので、キクモと呼ばれています。水槽で育てる植物として、販売もされています。

キクモの水上の葉は晩秋に紅葉します。水中の葉が紅葉するかどうかは、残念ながら確認していません。

タコノアシも第35回にも写真を載せましたが、そこには紅葉が写っていませんでしたので、別の写真を載せます。以前に述べたように、湿地や休耕田に生えるタコノアシ科の多年生植物ですが、近年数を減らし、準絶滅危惧種に指定されています。橙赤色の紅葉は秋から晩秋に見られます。



チョウジタデ 10月中旬 守谷市市之代地区



キクモ 10月中旬 守谷市同地地区



タコノアシ 10月中旬 守谷市同地地区

## 5 その他の植物：イヌタデ、キツネノマゴ、ヤマノイモ

イヌタデについては、[第8回「美しいタデの間たち」](#)にも掲載しています。ごく普通のタデ科の一年草で、6～10月に花が咲き、俗にアカマンマあるいはアカノマンマと呼ばれています。晩秋から初冬にかけて、赤ないし赤紫色に紅葉します。



イヌタデ 11月上旬 みずき野6丁目

キツネノマゴについては、[第17回「秋の野の花」](#)に掲載しています。高さ20～30センチほどの小さな一年草ですが、多くの種を含むキツネノマゴ科の代表種です。キツネノマゴの紅葉はあまり目立ちませんが、中には非常に美しく色付くものもあります。



キツネノマゴ 11月上旬  
みずき野第2調整池北(郷州里山)

ヤマノイモはヤマノイモ科の多年草で、在来種。林のへりや藪など、日陰になる場所にごく普通に見かける植物です。晩秋から初冬にかけて、葉は鮮やかな黄色に色づき、遠くからでも他の植物との見分けがつかます。



ヤマノイモ 11月上旬 みずき野山富園北斜面

話題が少し外れますが、ヤマノイモの芋はじねんじょ自然薯といい、とろろにすると味がよく、ナガイモやイチョウイモより高価です。ヤマノイモの芋はかいけい塊茎(例えばジャガイモ)でもなく、かいこん塊根(例えばサツマイモ)でもありません。茎の下部にこぶがで、地中に伸びていったもので、春に古い芋の上部に新しい芋がで、

古い芋が蓄えた養分を吸収して大きくなり、これを毎年繰り返してますます大きくなります。ヤマノイモの芋は植物学ではたんこんたい坦根体と呼ばれています。

## 追記：紅葉と草紅葉

通常、紅葉（「こうよう」・「もみじ」）といえば、樹木の紅葉をいいます。常緑樹も紅葉しますが、一般的には紅葉といえば落葉樹の紅葉を指しています。またイチョウの葉のように黄色く変色するものは黄葉と呼んでいます。

万葉集では、カエデを詠み込んだ歌があり、カエデは「かえるで」（カエルの手形の形からの連想）と呼ばれていました。カエデにもイロハモミジのように赤く紅葉するものと、イタヤカエデのように黄葉になるものがあり、赤でも黄でも気にはならなかったようです。

平安時代になると、はっきりと紅葉という名称が使われるようになり、もっぱら赤く紅葉するモミジやカエデを表現するようになり、春の桜に対し、秋のモミジが鑑賞の対象になったようです。源氏物語には「紅葉の賀」という帖があります。桐壺帝の先帝の賀の祝いが秋に行われたので「紅葉の賀」とタイトルされているのですが、すでに紅葉がこの季節の象徴になっていることが注目されます。「紅葉の賀」の次に「花宴」の帖が続き、春は桜、秋は紅葉が季節の象徴として定着していたことが窺われます。桜やモミジを愛でる宴は現代までも引き継がれています。

樹木のモミジはやがて落葉になって、地面を彩ります。一方、草紅葉の葉は普通落葉せず、茎や枝についたまま枯れてしまいます。そんなところにも、草紅葉には華やかさがありません。でも、人目につきにくい草の紅葉にもそれなりの美しさがあり、草紅葉という言葉には優しい響があります。晩秋や初冬に草紅葉を探しながら散策するのも一興です。